



《 東京オリンピックに寄せて④ 》 「疲れ切って走れません」 1964 東京



2020年夏季五輪の開催地に東京が選ばれた。56年前に開催された1964年の東京五輪のマラソンで命がけの戦いを演じたメダリストは何を思い、その後どんな人生を歩んだのか。マラソンで死闘を演じた3人の男たちは、それぞれ数奇な運命をたどった。アベベ・ビキラ（エチオピア）は、60年ローマ五輪で代名詞にもなった裸足ではなく、プーマのランニングシューズを履き、五輪連覇を達成した。円谷幸吉はゴール直前で英国選手に抜かれたが、堂々の銅メダルを獲得した。円谷と同学年の君原健二は半年前に同じコースで開かれた前哨戦で優勝。

アベベがレース6週間前に盲腸の手術をしていたこともあり、金メダル候補とも言われた。だが、8位に沈んだ。「調整はしっかりできたのですが、期待の大きさに耐えられず、当日は完全にアガってしまいました。ゴール後に選手控室に行くと、茫然とした様子でベッドに横たわる円谷さんがいました」（君原）。日本にとって陸上唯一のメダル。円谷は喜びに浸ることもなく、すぐに「4年後のメキシコ五輪を目指す」と宣言した。一方の君原は、五輪の重圧で心身ともに疲弊していた。所属先に退部届を出し、マラソンから遠ざかる。だが、のちに結婚することになる女性との交際を機に意欲を取り戻し、66年にマラソンに復帰。メキシコ五輪を想定した高地トレーニングも始めた。

しかし68年1月、盟友の訃報が届く。円谷が自ら命を絶った。遺書には「もうすっかり疲れ切ってしまって走れません」とあった。27歳の若さだった。「円谷さんは東京五輪の直後から、『国民の前でぶざまな姿をさらしてしまった』と自らを責めていました。亡くなる半年前の大会でも、腰に故障を抱えながら『メキシコで日の丸を掲げる』と思いつめていました。友人として『そこまで追い込まなくても』と声をかけるべきでした。自分なら救えた命だったかもしれません」（君原）。

メキシコ五輪に出場した君原さんは、「円谷さんの分も…」と意気込み、最終盤まで2位につけた。ゴールとなる競技場の手前で、後続に迫られた。後ろを振り返ってそれを確認すると、新たなパワーが沸き起こった。2位を死守し、銀メダルに輝いた。「なぜあの日、普段はしない『振り返り』をしたのか、実は今でもわかりません。きっと、天国からの円谷さんのメッセージだったと思います」。このレースには五輪3連覇を目指したアベベも出場していたが、故障もあり17キロ付近で棄権した。その後は母国に戻り、英雄として恵まれた立場にいたが、交通事故で半身不随となり、73年に41歳で亡くなった。君原は31歳で挑んだミュンヘン五輪で5位入賞を果たして、第一線を退いた。72歳となった今も、市民ランナーとして、フルマラソンに挑戦し続けている。昨年の東京マラソンは3時間37分で完走した。円谷幸吉の故郷、福島県須賀川市で開かれる「円谷メモリアルマラソン大会」に、毎年参加している。今年の10月に走るときは、「円谷さん、東京に五輪が戻ってきますよ」と墓前に報告するつもりだ。

9/27「週刊朝日」